

歴史教育の転換期によせて

木 村 明 人

I・序論

歴史教育も教育（Erziehung, education）の一端を担うかぎり一般的なその時代に対応した教育目標から自由ではないことは当然のことである。本稿ではそのような一般的な教育論についてではなく、現代という時代性のなかで学校教育とりわけ後期中等教育における歴史教育の基盤を考察することとしたい。

平成6年度（1994）からの後期中等教育における歴史教育は、戦後の「社会科」の一環としてのそれから外れて、新設教科としての「地理歴史科」の中の科目日本史（A・B）、世界史（A・B）として行なわれることとなった。加えて、世界史A（2単位）が必修科目とされた。ここに歴史教育を再考察する後期中等教育における一つの教育的問題が存在する。しかし、この変化が後期中等教育に加えられなかったとしても現在の日本や日本人のおかれた状況から歴史学も歴史教育も再検討されるべき時期に至っていることは、丁度10年前（1982年）の「進出」・「侵略」に端を発する教科書問題以来昨今の従軍慰安婦問題にいたる、過去に対する認識と責任問題としても、1989年以降冷戦構造の崩壊といった世界秩序の転換の時期に遭遇しているという現代の課題からしても、当然であると解さねばならない。

本稿では、後者の立場からの解明を主眼として論じることとする。即ち、歴史学及び歴史教育が戦後最も無視若しくは軽視してきた視点からの解明である。1947年（昭和22年）の新制高等学校の成立とともに「日本史」の高等学校への導入問題から始まって、「東洋史」・「西洋史」の「世界史」への統合と「日本史」の設置（1951年、昭和26年度）、皇国史観からの脱却・西欧中心主義からの脱却・マルクス主義の洗礼と偏向問題・等々に半世紀を費やしてきたのが歴史教育の、同時に歴史学の実態であったと解するものである。

隣接諸科学（考古学・民族学・民俗学・社会学・政治学・人類学等）の発達に触発されて発展した部分はあるにせよ戦後の歴史学・歴史教育には大きな欠陥が存在していたのである。即ち、GHQやCIE（民間情報教育局）に対応すること・戦争責任の天皇への波及をさけて天皇制を温存すること・極東国際軍事裁判（いわゆる東京裁判）への対応等々にはじまり、アメリカ主導の占領政策と、姿を現わしはじめた冷戦構造、対米従属問題に眼を奪われて、自国の歴史を責任を以て見直すことを怠り、戦争責任も極東国際軍事裁判の被告たちに押し付けてしまった。戦後の日本人は、経済的にも精神的にも「生まれ変わって」、「白紙」の状態から出直すことで、自らを「無罪」化してしまった。

従って、「戦争犯罪及び人道にたいする罪にたいする時効不適用条約」が1968年に国連総会（第23回）で可決され、当時の西ドイツはこれを批准したが、日本は棄権したまま今日に至っている。それ故、ドイツではニュルンベルク裁判の原則が今日でも生きているのに対して日本では「済んだことがら」となってしまうのである。観想テオリア（theoria）としての歴史学・歴史教育から、現実生活に対するプラクシス（praxis）としての歴史学・歴史教育へと再建されねばならないと考える。

戦後（1945年～51年）のこのような動きに関する事柄を年表にすると次のようになる特に、（）で付加した解説に注目されたい。

戦後教育の出発（1945～51年）

- 1945・10、「日本教育制度に付する管理政策」（GHQ）
 - 10、「教育及教育関係官ノ調査、除外、認可ニ関スル件」（GHQ）
 - 12、「神道指令」（GHQ）
 - 12、「修身、日本歴史及び地理」の課程中止等指令」（GHQ）
（以上の指令が、GHQの教育に関する四大指令であるが、この指令は、すでに1944年7月15日米 국무省の対日教育政策文書「PWC287」で決定されていたものである。しかし、「地理」の中止命令はGHQが補足したものである）
- 1946・2、「修身・国史及び地理教科同図書ノ回収ニ関スル件」（文部省通達）
 - 6、地理の授業許可 東京裁判開廷（5・3- 1948・4・16）
 - 9、教育課程改正委員会（46年4月発足）「社会科」の設置決定
 - 10、「教育勅語」奉読停止・日本史の授業許可
（教育勅語は、1948年国会決議で失効する）
- 1947・3、「学習指導要領一般編（試案）」教育基本法・学校教育法 公布
 - 4、新学制による小学校・中学校発足
 - 5、日本国憲法施行
「学習指導要領社会科編Ⅰ（試案）」
 - 7、「同社会科編Ⅱ」・「同東洋史編」・「同西洋史編」・「同人文地理編」
（この学習指導要領により同年9月より「社会科」の授業実施）
（この指導要領により、必修の「一般社会」と、選択社会科の「東洋史」・「西洋史」・「人文地理」・「時事問題」からの1科目制が全科目五単位でスタートした、これが戦後高等学校の社会科であった。ここに、高等学校にのみ「日本史」にあたる科目のないことが国史専攻者の就職問題も絡んで「日本史」設置の大運動に発展した。）
- 1948・4、新制高等学校発足
 - 7、教育委員会法公布
（教育委員の住民による直接選挙制としてスタートした。しかし1956年「任命制」にかえられて現在に至る）
 - 9、「小学校社会科学学習指導要領補説」
 - 10、「教科用図書委員会」設置「新制高等学校教科課程の改正について」
- 1949・4、「高等学校社会科日本史・世界史の学習指導について」
（文部省教科書局長通達）
（この「通達」によって、「日本史」の設置が決定的となり、これに対応して「東洋史」と「西洋史」をあわせて「世界史」が設置されることとなった。これによって、1951年の教育課程の改訂が行なわれた。）
 - 7、GHQのCIE（民間教育情報局）レッドページ開始
- 1950・6、朝鮮戦争勃発
 - 8、警察予備隊設置
- 1951・3、「中学校・高等学校学習指導要領社会科編、日本史の指導計画について」
（初等中等教育局長通知）
 - 7、「小学校学習指導要領社会科編」

- 9、サンフランシスコ講和会議・日米安全保障条約締結
- 10、「中学校・高等学校学習指導要領社会科編Ⅰ 中等社会科とその指導法」
- 12、「中学校・高等学校学習指導要領社会科編Ⅰ」
(この第一次改訂により、必修の「一般社会」と、選択社会科の「日本史」「世界史」「人文地理」「時事問題」からの一科目制が全科目五単位でスタートした。いわゆる「第一次改訂」である。)
(以後の改訂は「試案」ではなくなり、あわせて「告示」の形式となって法的強制力をもつに至ることとなる。)

II・「歴史」について

「歴史」ということばの意味についてはじめに明確にしておきたい。英語では、歴史を指すことばは一つの語 history であるが、意味としては二重の使われ方をしている。即ち、「過去に起ったことがら」(独語 Geschichte)の意味で使われるとともに、「過去に起った事柄に関する探求・研究」(独語 Geschichtswissenschaft)の意味でも使われる。このことは、古代中国以来東アジアでも別な観点からではあるが区別してきたから、ギリシャ・ローマ以来の西洋的観点とともに参考にすることができる。即ち、「志」・「誌」(記録・文書)と「史」(ふびと・記録を掌る官・記録)との使い分けの伝統である。

ここに、我々が「歴史」を考えるうえで重要なヒントが存する。過去のどのようなことがらも、その記録によって知る得ること、かつ、その記録は人によって作られたこと、更に、その記録は「その記録者が、ある視点や価値観から観て」纏めたものであること等である。従って、「過去に起ったことがら」の部分としての記録によって我々は「歴史」を構築しているのである。つまり、「過去に起ったことがら」のすべてを知り得ないということを承認しなければならないのである。(創造的フィクション性)①

さらに、「過去に起ったことがら」の部分でしかないその記録には、記録者の時代性や価値観や問題意識によってバイアスがかかってしまっているということも認めねばならないのである。

(史料批判の必要性)② かくして「歴史」は、単純に過去に起ったことがらから構成されるのではなくて、「歴史」が研究され、叙述される時点としての「現在における過去の構成」なのである。③ 言い換えれば、偶然的なもの(contingent)、必然的なもの(necessary)等々の混成体としての事実の世界から、現代の問題意識から観て必然性のある出来事(史料的価値を有すること・source)を、単なる出来事(event)から選択しなければ歴史が成立しないということである。かくして、現在構造(Gegenwartstruktur)から過去の事柄が史料として必然性を以て、開示(offenbaren)されてくることによって成立する時間空間的世界が、「歴史」であるとも表現できる。ローマの歴史家タキトゥス(Tacitus, 55~120)は、自己の同時代を問題として扱う「歴史」とそれ以前を扱う「年代記」(Annales)を区別していることは、このような考え方を象徴している。

注①すなわち歴史は、一方では、アリストテレスが区別した基準によって、創作ないしは文学に対立するが、他方ではまたおそらく同じ基準によって、年代記に対立するであろう。「実際にあったこと」と「あったかも知れないようなこと」の区別、あるいは取扱う対象の個性と普遍性の差異は、歴史が創作に対する関係について言われるのとおそらく同じ程度に、年代記が歴史に対する関係についても言われうるからである。かくて歴史は、年代記と創作との中

間に位置して、両者の間を微妙に動揺していると考えられる。言いかえれば、歴史とはそれ自身、年代記と創作との二重性格を持つものなのであって、歴史小説や教訓物語が歴史ではないのと同様に、単なる資料集やいわゆる「鉄と糊の歴史」もまた歴史の名には価しないものである。（講座哲学大系 第四巻 京都 人文書院 1963 P・396 加来彰俊）

注②果たして歴史家は過去の事象について正確な知識を持つことができるだろうか。おそらくそれは、厳密に言えば、不可能であろう。しかしかりにそれが可能だとしても、歴史家は本当に「あったことをあった通りに」、すなわち一片の主観をもまじえることなしに純客観的に記述するものなのだろうか。この点もおそらくそうではあるまい。意識的たると否とを問わず、事実の解釈には歴史家の主観がはいらざるを得ないから、歴史記述は当の歴史家の個性を離れては存在し得ないであろう。かくて結論を先にいえば、歴史の内容は、「あったことがあった通りに」書かれているというような単純なものではなく、事実という客観的要素と解釈という主観的要素とが複雑に絡み合ったものと考えなければならぬであろう。

（講座哲学大系 第四巻 京都 人文書院 1963 P・391 加来彰俊）

注②ランケ（Leopold von Ranke, 1795-1886）における史料批判的方法の確立によって、歴史研究は、その認識の客観性、方法的確実性が保証され、ここに近代科学の一つとして自己を主張することができたのである。それは、あたかも17世紀におけるガリレイの数学的実験的方法の確立による近代自然科学の成立と同様に、バターフィールドのことはを以てすれば、「歴史研究における科学革命」ともよぶべき現象であった。このようにしてランケは、「事物が本来どうであったか」とか、あるいはまた、「自我をいわば消しさって、ただ事物をしてかたらしめたい」とか言う言葉とともに、一般には「客観的」歴史家として知られるにいたった。しかしランケ自身は、この「客観性」がつねに一つの理想であり、課題であって、徹底的には決して実現されえないものであることをもっともよく自覚していた。ランケは、歴史家の主観を避けえないものと認めていたのであり、そればかりではなく、「現在の刺激」なくしては歴史研究をなしえないとすらかんがえていたのである。

（講座哲学大系 第四巻 京都 人文書院 1963 P・117 岸田達也）

注③古代でも中世でも、歴史家は主としてかれらが生きている時代の出来事を書き記した。即ち現代史が、古代・中世の歴史記述の中心テーマであった。ヘロドトスのペルシャ戦争史は150年位前まで、トゥキュディデスのペロポネソス戦争史は50年位前までさかのぼっているにせよ、その重点は彼らの現代史であった。ローマの歴史家カエサルやタキトゥスについても同様である。中世の世界年代記は、なるほど天地創造以来の遠い過去を記しているが、実際に作者の創作である部分は、彼らの現代史であった。

（講座哲学大系 第四巻 京都 人文書院 1963 P・58 兼岩正夫）

注③史学は文献をもっとも主要な研究資料とする。文献は人間が文字なる客観化する象徴手段を通じて、自分の意識を客観的な形に表現したものであり、わたしたちはそこに文献の筆者の事物の主観的認識を見得る。これを更に私達は自分の主観を以て解釈し、多くの文献を構成して、自己の歴史認識の体系をつくりあげる。その点で、史学は常に、他人の認識を媒介として、間接的に歴史事象に接している。かくて史学は人間の意識された限りの伝統を自覚し、現在の意識にとって必要な事象を選択して歴史記述を構成する。

（講座哲学大系 第四巻 京都 人文書院 1963 P・205 横田建一）

III・時間・歴史観

我々の時間に関する観念は、「いま」と「むかし」を基本とする。勿論、「いま」・「むかし」の延長に「未来」があるから、三区分が時間の基本構造となろう。しかも、この移りゆきの意識の根底には生活現実における「変化」の意識が存在しなければならない。ここで注意せねばならないことは、因果系列における「過去」「現在」「未来」といった客観的な区分が必ずしも成立しない歴史的な過去現在未来（人間の行為、生活現実の世界）のことである。④

人間の行為、生活現実の世界（現在構造）における時間は、次の如くに考えても理解できよう。人が石を投げて小動物を狩る場面を設定してみよう。石が当たってその動物が倒れた状態（未来）が設定されているのはじめてそのために石を選び、手に執り、機会を選び、「いま」石を投げるのである。そして「過去」における諸経験がこのプロセス全体に総挙げされて活用されている。従って、人間の現在構造における時間の機能的な存在の仕方は、現在が過去を規定し、未来が現在を規定してもいる複雑なフィードバック機構をなしているのである。このように解してはじめて、「現在」の生活現実としては無意味な行為も「未来」若しくは、時として「過去」のための行為として有意味な行為をする人間存在を理解することが可能となる。⑤

注④日本語の「いにしへ」は、明らかに「往にし方」であって、「いま」と対するが、「往く」という意味の動詞からきている。英語のpast（過去）はpassという動詞から来ているし、またドイツ語のVergangenheit（過去）は、vergehen（過ぎ行く）、さらにはgehen（行く）から来ている。「むかし」については、「向く」という動詞から来たとする説もあるが、アイヌ語の「マク」（後方）と同源だとする説もある。英語のantiquity（古代）、即ちラテン語のantiquitasは、ラテン語のante（before）、ギリシャ語のanti（opposite）、ドイツ語のAntwort（返答）などにみられるanteという語源から来ている。即ち、過去という意識は、古今東西を問わず、「行く」という意味の動詞か、または空間的前後関係を現す副詞から由来しているのである。そこには共通の意識形態があり、そこで区別されているのは、過去と現在との二つである。

（講座哲学大系 第四巻 京都 人文書院 1963 P・227 藤縄健三）

注④このような日常語の検討から知られるごとく、素朴な、それ故に基本的な時代感覚においては、現代と古代との二時代区分があるだけである。そして実際、意識的に明確に表現された歴史観においても、さらには書かれた歴史においても、上述のごとき二時代区分が基本になっている場合が多い。周知のごとくヘシオドス（Hesiodos、紀元前8世紀頃のギリシャの詩人）は、金・銀・銅・英雄・鉄・という五つの時代を区別した。ここでは金属の順位で示されている下降歴史観と、英雄時代と自身の時代とを対比する歴史観とが重なっており、全体として幸いなる往昔と悲慘なる現代とが意識の基本になっている。またトゥキウディデス（Thukydides、紀元前460～398、ギリシャの歴史家）においては、いわゆる「古代史」Archaiologiaの部分と同時代史の部分とが明確に区別されている。タキトゥス（Tacitus、紀元後55～120、ローマの歴史家・政治家）は、同時代史を扱う「歴史」Historiaeとそれ以前を扱う「年代記」Annalesとを区別している。さらには前述のごとくヨーロッパ人の三時代区分も、実はむしろ古代と中

世以降との二時代区分であった。

（講座哲学大系 第四巻 京都 人文書院 1963 P・227 藤縄健三）

注⑤私たちが行為する場合には、まず自分が未来において実現しようとする事態を目的として表象し、その目的を実現するための手段として、現在自分がとるべき行為が決定される。しかも未来が現在を決定するというこの考え方を、そのまま現在と過去との関係に移すことも可能であるから、そうすると現在が過去を決定してきたことになる。過去が現在を、現在が未来を決定するのが因果論であるとすれば、未来が現在を（従って現在が過去を）決定するのは目的論といわれる。この二つは、自然や社会の現象を学問的に説明しようとする場合の対立した説明方式でもある。そして近代科学の発達とともに因果論的な説明方式が優勢となり、目的論的説明は追放されるに至ったが、後者もかつてはアリストテレスの権威に支えられて大きな力を持っていた。そしてこの権威の没落とともに、目的論も科学の領域では弱体化したのである。しかし人間の行為を説明しようとするときには、いちがいに因果論的説明が目的論的説明よりもすぐれているとはいえない。人間にとって目的設定は本質的なことだからである。

（時間と人間 現代新書439 講談社 1976 P・132 中埜 肇）

「歴史観」は、歴史家にとって意識として存在し、歴史家の「影」のごとき存在と考えると理解しやすい。歴史家（歴史をみる者）にとって、現実生活のなかから個人的にも時代的にもどうしても解明したい（知りたい）とされる問題が存在したとしよう。この現在構造の抱かせる疑問を解くためには、実験や再現の不可能な歴史的問題であることから、過去の記録・事実頼るしか方法がない。しかし過去は無限に多くの事柄で満たされているのである。そこで、歴史家（歴史をみる者）は、「それ」によって、個々の事実に意味をあたえ、その意味に基づいて膨大な過去の総体から必要な事実を取捨選択したり、事実の間に一定の脈絡をつけたりすることとなる。この「それ」を「影」と呼ばないで命名するとすれば、その歴史家（歴史をみる者）の「歴史観」となるであろう。この「歴史観」のみを取り出して問題にすることは可能であろうが、それは哲学乃至は思想の問題となるであろう。⑥

循環史観であれ、終末論もしくは下降史観であれ、はたまた進歩史観・歴史主義・生態史観と称されるものも、それらの「見方」が歴史探求の背後に付随した「影」であるかぎり、歴史分野のパラダイムとしては許容されねばならないであろう。哲学の批判は甘んずるとして。

かくして歴史を観るものにとって、神学者や哲学者でないかぎり歴史観は結果としてあきらかになるもの、しかしそれが存在していないと歴史探求ができないものとなる。くわえて、歴史観は、歴史に対してなんらかの意味、目標を設定しようということ、事実の連続のうちに、なんらかの統一的、普遍的原理、ないしは事実を超越した理念の探求を指向することから、個別的、特殊の諸事実としての歴史的世界とはアンチノミーな存在である。

注⑥歴史観の変遷過程は、まず歴史を普遍化することから出発し、次いでその絶対化、理念化へと移行している。しかも、その過程は、歴史と歴史観の両者の間の、矛盾対立関係が次第に激化し、露呈されてくる過程でもある。ギリシャ人の循環史観は、歴史普遍化の第一次の試みである。ギリシャ的な歴史観は、ポリビオス（Polybios, 紀元前203～120）の歴史記述にお

いて、いちおうの完成をみる。彼以前にも、ヘロドトスや、ツキディデスの歴史記述があることはある。しかし、これらの歴史記述の場合、対象が記述者自身の直接体験に限定されており、体系的な歴史観は、まだそこにはみられない。

（講座哲学大系 第四巻 京都 人文書院 1963 P・262 大島康正）

注⑥ヘーゲルは、「歴史哲学講義」Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte. の序論のなかで、歴史考察を 根源的歴史 (ursprüngliche Geschichte), 反省的歴史 (reflektierende Geschichte), 哲学的歴史 (philosophische Geschichte)の三段階に分類し、第一段階の例として、彼ら（ヘロドトス・ツキディデス）を挙げている。これに対し、ポリビオスは、ヘーゲル (G. W. F. Hegel, 1770～1831)も認めているように、古代の歴史家のなかで統一的な歴史観を提示した唯一の人であり、いわば、ギリシャ的円環的循環的歴史観の完成者であるといつてよい。もちろん、ギリシャ的歴史観の原型は、古代ギリシャ人自身の間に存在していた、「歳霊信仰」や、オルフェウス教の「靈魂輪廻」Metempsychosis思想にも求められよう。しかし、ポリビオスは、ポエニ戦争とローマの世界統一という具体的な歴史事実を軸にして、歴史を、君主政体・貴族政体・民主政体の循環的表出であり、運命（モイラ）の転変であるとする歴史観を提起している。しかも、彼は、個々の歴史的諸事実を超え、秩序づける理念として、「オイクメーネー」の思想さえも提起しているのである。彼の場合、個々の歴史諸事実の連続的継起の相での把握、及び、歴史を超えた理念の提示の二点がみられるのであり、歴史の体系化、歴史観のバイオニアとして注目し価値する。ギリシャ的歴史観の後世に対する影響も、無視することはできない。たとえば、マキャベリ (N. B. Machiavelli, 1469～1527. イタリアのフィレンツェの政治家・歴史家) は、歴史過程を、国家の盛衰の循環としてとらえている。また、同じくイタリアの歴史学者ヴィーコ (Vico, 1668～1744) も、歴史を「過程と再過程」corso e ricorso であると考えている。また、歴史過程を、有機体と同様に生滅を反復するものとする生態史観も、ギリシャ的歴史観の再現とみることが出来よう。

（講座哲学大系 第四巻 京都 人文書院 1963 P・263 大島康正）

IV・歴史（世界史）の問題（提言）

「新しい世界史の授業」（山川出版1992）において、提言されている主題28個のうち、「現代世界の課題」として、挙げられている7つの主題とその授業展開は、注目し価値するものと考ええる。その主題は以下のものである。「歴史を自分史につなげるために」・「第三世界はなぜ飢えるのか」・「諸君の大統領 我らの首相（89年東欧革命とペレストロイカ）」・「錯綜する四つのダブル（出口の見えないパレスチナ問題）」・「血か 土か 金か（新生ヨーロッパの民族問題）」・「平和をめざす生徒たち（ベラウ非核憲法と平和学習）」・「レストランからエビが消える日（アジアから環境問題を考える）」というものである。

何故に注目されるかといえば、これらは、旧来の東洋史・西洋史の範疇から最も離れた問題のたて方であり、かつ、それを学ぶ者（生徒・教師）の「現実世界」にダイレクトにかかわる知識の形式を備えているからである。このような手法による授業展開の事例研究としては高く評価されるべきものと理解する。歴史を学ぶもの（生徒・教師）の現実生活即ち、現在構造（Gegenwartstruktur）の要請に応える授業であるからである。一見すばらしく見える授業には、「学問的」といわれる厳しさか、興味本位の裏話の集成かに陥ったものが多いがその種のもの

とは全く異なる。このように、学ぶ者（生徒・教師）の「現実世界」に関わる時間的空間的世界こそ「世界」であり、この「世界」を学び、考えてゆくことが「世界史」でなければならないと考える。「いま」のそして「将来」の我々に深く関わる時空世界を対象としてはじめて「世界史」は成立するであろう。

「いま」の我々に関わる「世界史」、「これから」の我々に指針を与える「世界史」を構築すべき時期である。戦後、「日本史」の高等学校への導入と、「東洋史」の不人気に刺激された状況のなかで「西洋史」と合併されて設置された「世界史」の呪縛からそろそろテイクオフすべき時なのである。戦後の「世界史」は、学ぶもの（生徒・教師）の現実生活即ち現在構造に立脚せずにスタートし、「東洋史」・「西洋史」の「学問的」要請に応えてきたのである。（この基本的性格は、「日本史」にも存するであろう。）勿論、このような性格をインプリントした責任は、戦後政治とりわけ文教政策にいちばん大きなものがあつたことは認められる。それとともに、戦後の「社会科」の成立事情にも由来すると解釈される。確かに、「国史」、「東洋史」・「西洋史」のメタモルフォーゼとしての「日本史」、「世界史」の問題でもあるが、同時に「一般社会」・「時々問題」という科目の存在が、返って、「日本史」、「世界史」を「国史」、「東洋史」・「西洋史」へと追いやっていたのであろうから。すなわち、「一般社会」・「時々問題」という科目の存在を与件として成立した歴史二科目は、「社会科」の範疇に入れられてはいたが「社会科」としての機能ははたし得ない「よそ者」であつたという成立事情が存在したのである。この呪縛からの解放を提言したいのである。

この解放から、「現在における過去の構成」が可能となり、「現代の課題」に敏感に応える過去の認識が成立し、「過去に対する責任」を持った認識としての歴史認識が成立するであろう。この指向に応える参考文献を挙げれば次のものが挙げられる。

『新しい世界史の授業』山川出版1992

戦後「世界史」が何を問題にしてきたか（p 2～19）

斬新な主題（28個）を提言

『世界史教育の理論と世界史の構成』桐書房1989

「日本史・世界史」の登場問題（p 10～23）

『歴史教育と歴史学』山川出版1991

明治以降の教育史（p 11～23）

「日本史」・「世界史」の新しい視点を提言

『社会科カリキュラム論研究序説』学文社1989

「日本史・世界史」の登場問題（p 120～167）

『社会科カリキュラム論研究序説』学文社1989

戦後「社会科」の歴史（p 56～101）

「歴史教育と歴史学」の視点・「新しい世界史の授業」の主題に加えて私が提示したい視点は、国家・民族・文化を提起したい。また、過去に対する認識と責任問題に関しては、上記の書籍以外に『アジアの「近代」と歴史教育』未来社1991をあげたい。

国家論・戦争・平和・世界秩序の転換・民族・文化論等については、以下の書籍を中心に構想している。

- 『国際政治の分析枠組』東京大学出版会1992
- 『国家とは』（転換期における人間 第五巻）岩波書店1989
- 『国家と革命』（シリーズ世界史への問い）岩波書店1991
- 『プレップ国際関係論』晃洋書房1992
- 『いま国家を問う』大阪書籍1984
- 『現代ヨーロッパの地域と国家』有信堂1988
- 『国際関係思想史研究』三省堂1992
- 『国家を超えて』御茶の水書房1991
- 『パワー・ポリティクスその原型と変容』有信堂1991

- 『規範としての文化』平凡社1990
- 『文化とは』（転換期における人間 第10巻）岩波書店1989
- 『いま、なぜ文化を問うのか』日本放送出版会1990
- 『文化の否定性』中央公論社1988